

Ⅲ 実践研究



実践研究委託団体

- 1 南九州大学 野村研究室
- 2 特定非営利活動法人 ライフカンパニー新富
- 3 延岡市地域活動支援センターみなと
- 4 特定非営利活動法人
障害者自立応援センターYAH!DOみやざき
- 5 株式会社グローバル・クリーン
- 6 霧島おむすび自然学校

取組推進校

- 1 宮崎県立日南くろしお支援学校
- 2 宮崎県立都城きりしま支援学校

インクルーシブな社会形成と人材育成をめざして

実践研究 I

南九州大学 野村研究室 〈都城市〉

取組の目的

- ・ 障がい者を対象とした運動・動作に関する講座の実施
- ・ 手話やAT・AAC等の支援機器の活用、発達障がい児の支援等、障がい者を支援する人材育成を目的とした講座の実施
- ・ 福祉制度や家族支援、福祉機器の活用などに関する福祉講座の実施
- ・ 障がい理解や支援者の育成に資する活動

取組の経緯

- ・ 障がいから生じる身体の緊張や、緊張のために意図通りに身体が動かない状態に対して、手や足を動作介助し、意図通りに動く身体や姿勢の獲得させることは、心の安定にもつながると考え、実施することにした。
- ・ 障がい者にとって、家の外に出て活動する機会は限られている。そこで生涯学習の視点に立って地域で様々な活動をするには、障がい者の社会参加という点でも意義深いものと考えた。さらに、そこに学生も共に参加することで、障がい理解の他、支援について考えることができ、人材育成の面でも有効な取組だと考え実施することにした。

取組内容

I インクルーシブなスポーツ教室の活動

インクルーシブなスポーツ教室として、卓球バレー教室、ランニング教室等を実施した。

(1) 卓球バレー教室

教室は特別支援学校の卒業生2名と、幼稚園児1名、その保護者の参加で行われた。

音の出る球を見て聞いて相手に返すという競技で、一般の卓球に比べ、参加への抵抗も少なく取り組むことができる競技である。また、車椅子での参加も可能であり、地域の方も交え、障がいの有無に関わらず誰もが楽しめる教室となっている。

競技はもちろん、準備や片付けもみんな協力して行っている。

(2) ランニング教室

特別支援学校卒業生や地域の視覚に障がいのある方が支援者の伴走にて行う教室である。保護者と共走り、伴走者協会の支援者と走ったりして汗を流している。

支援者と共に走る活動を通して、一緒に走る際に必要な相手への理解や配慮が、支援者も含めた参加者相互の学びの場となっている。



【卓球バレー教室】



【ランニング教室】

2 心理サポートの活動

(1) 宮崎県肢体不自由児者父母の会 心理リハビリテーションの会での活動

本活動は、肢体不自由児者の姿勢や動作の改善をねらいとして、月に一度、宮崎市総合福祉保健センターにて行っている。障がいのある人への支援を学ぶ機会として、野村研究室の学生も活動に参加している。

12月に実施された宮崎市総合福祉保健センターでの1日キャンプには6名の学生が参加し、障がいのある方のリラクゼーションの進め方や姿勢づくり、動作介助を共に学ぶ機会となった。また、食事介助や保護者との交流などを行う貴重な場であった。



【動作介助の様子】

(2) 特別支援学校を会場とした活動

特別支援学校PTAの協力のもと、11月末から12月初めにかけて、姿勢や動作改善のための保護者研修会を3回実施した。障がいから生じる過度の緊張により四肢の可動域が限定されることは、学校卒業後の生活に大きな影響がある。そこで重度重複障がいのある児童生徒を主対象として、保護者自身で我が子にリラクゼーション手法や動作介助ができるような内容とした。



【保護者研修会の様子】

3 手話講座

都城手話協会の2名を講師として迎え、聴覚障がい者への支援者育成という目的で実施した。地域で生活する聴覚に障がいがある方への支援はもちろん、本学に在籍する学生へのコミュニケーション形成にもつながっている。

本講座の他にノートテイク講習会も計画していたが、コロナ感染の状況から延期となった。

取組の成果と課題

(1) 成果

- ・ 宮崎県肢体不自由児者父母の会や特別支援学校PTAでのリラクゼーション手法や動作介助の研修会では、参加者からも「多くの学びがあった。」等の好意的な感想が聞かれ、有意義な会となったと考える。
- ・ 本学の学生にとっても、障がいのある方と直接交流することができる貴重な機会であり、共に活動する中で相手への理解や配慮を学ぶことができる点で、人材育成に寄与できたと考える。

(2) 課題

- ・ 継続的な活動の実施。幅広い人材育成。コロナ禍での実施方法。

今後に向けて

- ・ スポーツ教室や手話講座等、履修証明制度などを視野に入れて、障がいの有無に関わらず共に学べる機会として大学で実施できるよう検討していきたい。
- ・ 今年度も様々な団体と連携して取り組むことができたが、次年度はより多くの関係団体を巻き込んで実施し、インクルーシブな社会形成につなげていきたいと考える。



安心してチャレンジできる居場所「クラブ ガチャ」

実践研究 2

特定非営利活動法人 ライフカンパニー新富 〈新富町〉

取組の目的

- ・ 社会福祉協議会や町行政と連携した取組
- ・ 音楽や調理活動等を通して、障がい者の学校卒業後の生きがいづくりにつながる取組
- ・ 園芸活動等の様々な体験を通じた、障がい者の就労支援につながる取組
- ・ 当該事業所の利用者にとどまらず、他団体と連携した取組

取組の経緯

- ・ 障害福祉サービス（自立支援・就労継続支援 B 型）を運営しているが、利用者の方々の活動や社会参加活動等に困難がみられた。彼らが安心して継続的に活動できる場所が必要だと思った。
- ・ 新富町社会福祉協議会や福祉課、教育長に相談したところ、活動の後援や活動場所の提供（旧上新田小学校跡地）等の協力が得られ、今回の取組に至った。

取組内容

1 事業のねらいと主な活動

生活に対する充実感やストレスの解消、社会参加（共生社会の推進）への意欲をもつことをねらいとし、主に知的障がい者・自閉症スペクトラムの方を対象とした活動を計画した。

(1) 農作体験

- ・ 季節の野菜を植えてその成長の観察が、次回来ることへの楽しみとなるようにした。
- ・ 土に触れること（土の中のバクテリアの働き）がストレス軽減や健康増進に効果がある。
- ・ 就労体験のひとつとして実施した。

(2) 体を動かす活動（スポーツや音楽活動）

- ・ 学校を卒業すると登下校で歩くことや体育の時間がなくなるため、極端に体を動かすことが減り、体重が増え体力が衰えてくる。そのため、運動不足の解消や健康維持、健康増進の役割につなげることができる。
- ・ 年齢や障がいの有無に関係なく楽しめる活動で、無理なく安心して取り組めるものである。
- ・ 会話が苦手な方も交流できるスポーツという点で、仲間づくりや生活圏の拡大に期待できる。
- ・ 決められたルールを守ることや、チームメイトを意識することなどが、社会性を養うことにつながる。

2 取組の詳細

(1) 活動場所と活動日時

- ・ 活動場所：旧上新田小学校跡地 花壇及び体育館
- ・ 活動日時：第 3、もしくは第 4 土曜日
13:30～

(2) 参加者及びボランティアスタッフ

- ・ 知的障がい者の当事者及びその家族
- ・ 就労支援施設に通所する利用者及び支援員
- ・ 町内の放課後等デイサービスの利用者及び支援員
- ・ 社会福祉協議会・教育委員会・福祉課、その他



【野菜間引き】

(3) 活動の具体的な内容

◆令和3年10月30日(土曜日)

《野菜の種を植えよう》

- ・ 畑を耕して冬の野菜、大根、かぶ、春菊の植え

《楽しく体を動かしてコロナでなまった身体をしゃっきりさせよう》

- ・ ストレッチ、フィットネスダンス、ドッチボールを親子で和やかに楽しむ。

◆令和3年11月27日(土曜日)

《野菜の間引き、水やり》

- ・ 生育の良い株を残して他の株を抜く。
- ・ 間引きしたものをその場で食べてみる。

《スペシャルオリンピックスの競技体験》

- ・ スペシャルオリンピックスのコーチ2名を講師に招き、フライングディスク体験を行う。
- ・ ルール説明と練習後、3つのチームに分かれて競技を行い、得点を競い合う。

◆令和3年12月18日(土曜日)

《野菜が収穫できるかな》

- ・ 収穫の予定だったが成長が不十分であったため、次回へ延期することにした。(肥料不足が原因)

《クリスマス音楽会》

- ・ 音楽療法士を迎え、音付き絵本の読み聞かせ、楽器演奏、ダンス等を楽しむ。

それぞれの障がい特性に応じた配慮がなされ、参加者全員が楽しく自己表現できる場となっていた。



【親子でドッチボール】



【フライングディスク指導】



【クリスマス音楽会】

取組の成果と課題

(1) 成果

- ・ 新富町の社会福祉協議会や教育委員会、障がい者基幹支援センターの職員、地域の関係団等の協力が得られ、計画した活動は比較的スムーズに行うことができた。
- ・ 参加当事者からは「ずっとやってほしい。」「久しぶりに知人に会うことができ嬉しかった。」保護者や支援員からは「休みの日に家族以外と過ごすことがないので世界が広がってよかった。」「利用者さんの新しい姿が見れた。支援のヒントにしたい。」との声をいただいた。

(2) 課題

- ・ 継続して行うための体制づくり、人材育成。財源の確保。コロナ禍対策。

今後に向けて

- ・ 今年度、8回のイベントを計画していたが、コロナ感染拡大のため3回しか開催できなかった。今後はウィズコロナ時代に対応できるイベントの必要性を感じた。
- ・ 参加の意思はあるが1人で会場まで行けないという声があった。福祉サービスやローカルタクシーの利用など社会資源を利用して参加する方法を検討し、提案したい。

特定非営利活動法人 ライフカンパニー新富

<https://r.goope.jp/lifecompany>



誰もが分け隔てなく共に生きる社会を目指して～リカバリー体験を通して

実践研究3

延岡市地域活動支援センターみなと 〈延岡市〉

取組の目的

精神障がいや病気からくる生きづらさを体験した当事者が、地域の一員として当たり前暮らし、同じ障がいをもつ仲間を支援しているピアサポーター活動を知ってもらうことで、障がい当事者のリカバリーを推進するとともに障がい者の理解を深める。

取組の経緯

「地域活動支援センターみなと」は、2011年開設以来、障がい当事者だけでなく、家族、支援者、地域の方と共に学び、交流を深めることを目的として「みなと研修会」を立ち上げ、様々な観点から取り組んできた。研修会は、当事者との交流の場で、よい啓発の場になったが、さらなる啓発を推進するため、長崎大学が10年間にわたり取り組んでいる生涯学習の取組やピアサポート活動を共有し、延岡の地にも障がい当事者を「経験ある専門家」として根付かせていきたいと考えた。コロナ禍でリモートでの開催を余儀なくされたが、長崎県の活動だけでなく、県内各地のピアサポート活動について共有することで、当事者のリカバリーを推進した。

取組内容

Ⅰ 研修会の開催

(1) 講演 =長崎県のピアサポート活動に学ぶ=

障がい当事者を「経験のある専門家」として捉え、専門家と当事者との共同創造によるピアサポートプログラムなどの生涯学習活動について紹介する。また、リカバリーストーリーを語ってもらうことで、障がい（者）の理解を深めるとともに、病気や障がいで生きづらさを感じている当事者のリカバリーを推進する。

- 長崎大学の生涯学習の取組について
講師：長崎大学医学部保健学科教授 田中 悟郎 氏
- ピアサポートみなと（長崎県）の10年の歩みについて
講師：ピアサポーター 片岡 史和 氏
- リカバリーストーリー
講師：ピアサポーター 杉本 哲文 氏
ピアサポーター 片岡 洋子 氏
ピアサポーター 富永 遼子 氏



【研修会の様子】



【「ピアサポートさくらの会」の発表風景】

(2) 宮崎県内のピアサポーターからのリレートーク

県内の地域活動支援センター等で活動するピアサポーターから、「活動の今&これからの夢・活動」を語ってもらうことで、ピアサポート活動の理解を深める。

- 地域生活支援センターすみよし
- 江南よしみ地域生活支援センター
- 地域活動支援センター「和み」
- 地域生活支援センターWing

- 地域活動支援センターゆるとタウンとんでーの
 - 地域活動支援センターしんとみ
 - 日向市ピアサポーター
 - 延岡市地域活動支援センターみなと
- (3) 支援者等からの情報発信・エール



【熱心に聴講する作業療法学科の学生】

2 その他

- (1) 啓発活動：当センター及び「ピアサポートさくらの会」DVDを作成し活動紹介
- (2) 交流会：今回の研修会をきっかけに、互いの活動や意見交換を実施

取組の成果と課題

(1) 成果

- ・ リカバリーについてその背景が理解でき、リカバリーカレッジなど居場所を開設することで、生活満足度が向上し入院等の減少による医療費削減効果に繋がるなど重要性も再認識できた。
- ・ 精神障がい者は、周囲の否定的な考えや態度に影響を受け、自分自身への否定的な考えが芽生え、悲しみや不安、恐れにつながり、やがて引きこもりや孤独また自殺まで追い込まれてしまう。そこからの回復には、治療だけでなく専門家や家族の支援、仲間との語り合い、ピアサポートが重要である。本研修の当事者のリカバリーストーリーでは、病気や障がいからくる人間関係や生活のしづらさなどの苦難を、仲間や支援者の力を借りて乗り越え「自分も誰かの力になりたい。」と活躍している実体験があり、参加者にとって、とても勇気づけられるものであった。
- ・ 県内ピアサポーターからの発信では、同じ仲間が希望をもって頑張っている姿に刺激を受け、これからの活動の参考と今後の交流のきっかけになった。
- ・ 福祉を学ぶ学生にも、当事者の生の声を聞いてもらい、将来の支援につなげる場となった。
- ・ 行政、教育、医療現場など各方面から、今後に繋がる有意義な意見やエールをいただいた。
- ・ コロナ禍の中、オンラインだからできる交流が体験でき、今後の活動進展に繋がる。
- ・ 当センターの活動やピア活動の紹介DVDを作成し、今後の活動紹介に生かしていく。

(2) 課題

- ・ 人材と予算の確保
- ・ 障がい者に対する理解促進

今後に向けて

(1) 障がい者に対する理解促進

多職種・多機関と連携し、ピアサポーターの活動やリカバリーストーリーなどのDVD等も利用し、機会をとらえて発信していく。

(2) イベントでの啓発

イベントなどに企画から参画し、共に活動することで、互いの理解につなげていく。

医療法人建悠会 延岡市地域活動支援センターみなと

<https://yoshidahospital.or.jp/cms2/institution/minato/>



知り合うことから始めよう！！

実践研究4

障害者自立応援センターYAH! DOみやざき
〈宮崎市〉

取組の目的

- ・ 本事業の生涯学習の場を単に学びの場とするだけでなく、地域の人と関わりがもて、家庭以外のもう一つの居場所となるようにする。
- ・ 障がいの有無に関わらず、そこに参加する人たちが、楽しみながら主体的に関われるように、企画・運営していく。

取組の経緯

今年度は、障がいのある若い人たちと宮崎福祉医療カレッジ社会福祉士学科の学生とで、共に楽しめるレクリエーションを企画し、参加者を募り実施することにした。コロナの影響で計画通りにはいかなかったが、今後の活動に向けて、どのような計画を立てていけばよいかを考えるために、まずは若者同士、互いの理解を深めるためのワークショップやレクリエーションを行った。

取組内容

I 宮崎福祉医療カレッジ学生とのワークショップ

(1) 講話 ～一人ひとりの歩み～

まずは、互いを知るという目的から、障害者自立応援支援センターYAH! DOみやざきのスタッフ4人の障がいのある方々から、これまでの人生や自分の障がいのことについて語ってもらった。

(2) グループワーク

障がいのある人と専門学校生とで共に楽しむためのレクリエーションの企画について話し合った。意見交換では「山登りがしたい。」「ファッションショーやおしゃれがしたい。」「デイキャンプがしたい。」など一人ひとりの思いが話され、それぞれの思いを実現させるために具体的な計画を立てていくことにした。



【講話の様子】



【グループワークの後にみんなで】

しかし、具体的なレクリエーションの企画を考えていくには、まずは「もっと互いのことを知り合うべき」という意見が挙がった。また地域社会で共に活動するには、どのようなことができ、どのような配慮が必要なのかを考える必要があるため、まずは「レクリエーション第1弾」として計画することとした。

2 レクリエーション第1弾 ボウリング&食事会

(1) ボウリング

宮崎市内のボウリング場に行く計画を立てた。障がいのある人と学生を3つのグループに分けて、グループ対抗のボウリングを共に楽しんだ。しかし、実際に車椅子でボウリングを行おうとすると、投球するところまで幅が狭く車椅子では進むことができない、という課題が見つかり、4人がかりで車椅子をかかえてそのバリアを乗り越えることになった。

(2) 食事会

ボウリングの後、みんなで買ってきたものを持ち寄って、それぞれ自分の趣味や日々の生活のことを語り合いながら、楽しい時間を過ごした。



【ボウリングの様子】



【バリアを超える！】



【食事会の様子】

取組の成果と課題

(1) 成果

- ・ 障がいのある人にとって、ボランティアと一緒に最初から企画や準備に関わることで、いろんな経験ができ、そのことが小さいけれど自信につながった。
- ・ ボランティアの学生にとって、障がいのある人と対等に話し合い、一緒にレクリエーションを楽しむ経験は、共生社会の意味を考えることにつながった。

(2) 課題

- ・ 他の障がいのある人やボランティアで関わってくれる人の輪をどうやって広げていくか。
- ・ 取組を継続、定着していくために、活動の経費をどう確保していくか。

今後に向けて

- 障がいのある人もない人も、共に楽しめるレクリエーションを行う。
- ・ 今回参加したメンバーを中心に、よりたくさんの人に参加してもらえるよう他の学校などにも呼び掛ける。
- ・ 障がいのある人とボランティアが意見を出して、「やりたいことリスト」を作り、その中から実行に移していく。
- ・ その際には、障がいの有無や種別、程度、年齢を問わず、誰でも参加できるものにする。

特定非営利活動法人 障害者自立応援支援センターYAH! DOみやざき

<https://yah-do.com/>



障がい者が安心して働ける社会をめざして

実践研究 5

株式会社グローバル・クリーン

〈日向市〉

取組の目的

障がいの有無だけでなく、年齢や性別に関係なく、誰もが平等に質の高い教育を受け、安心して働き続けられる共生社会実現のため、宮崎県の実態に合った生涯学習の在り方について「プロフェッショナル清掃研修」を通して学び、持続可能なまちづくりに活かしていくことを目的としている。

取組の経緯

2013年からスタートした宮崎クリーン部会（宮崎県内のB型福祉サービス事業所向けのプロフェッショナル清掃研修）による工賃向上と新たな仕事づくりの勉強会を発展させる「チャレンジド・プロ清掃研修」を開催した。今回は、プロフェッショナル清掃の基礎研修だけでなく、コロナ禍により、対面とオンラインのハイブリッド開催とし、全国の同じような思いをもった方々を繋ぎ、障がい者の社会進出と働きがいまで考える研修を行った。

取組内容

1 チャレンジド・プロ清掃研修①

(1) 除菌清掃基礎講座

ビルメンテナンス協会の認定講師であるワタナベ美装の渡邊氏を講師に招き、プロフェッショナルの清掃と掃除の違い、除菌清掃とは（トイレの除菌清掃）、カラーリング、清掃手帳等、除菌清掃についての基礎を学んだ。

(2) チャレンジド・プロ研修8年からの学び

グローバル・クリーンの税田氏より、8年続けてきたチャレンジド・プロ研修の取組からプロ清掃の付加価値をいかに工賃向上につなげ、就労を目指すスキルを身につけられるか、また、宮崎、大分、石川、埼玉、京都へ広がる可能性についても報告された。

(3) パネルディスカッション

「チャレンジド・プロ清掃の仕事づくりと障がい者の社会進出（共生社会）の実現」をテーマに障がい者雇用を支援している全国（宮崎、京都、茨城、石川）7名のパネラーと活発な討論を交わすことができた。



【チャレンジド・プロ清掃研修①の様子】

2 チャレンジド・プロ清掃研修②

(1) 日向市役所トイレ清掃見学

日向市役所のトイレ清掃を受託している日向市内のB型福祉サービス事業所の視察見学を行った。利用者（障がい者）の活躍している実際の清掃現場を見学した。

(2) トイレ除菌清掃の実践研修

コロナ禍により、時間短縮となったが、ブラックライト、ATP（汚染度チェッカー）を活用して、トイレ除菌清掃の見える化の実践研修を行った。

(3) パネルディスカッション

「SDGs 働きがいも経済成長も～障がい者のプロフェッショナル清掃から働きがいを考える～」をテーマに、学識者は横浜市立大学の影山先生、企業側はグローバル・クリーンの税田氏、福祉側はくりーん・わーくす中野氏、サンシャインワークス内田氏に参加を依頼し、様々な立場の方々と障がい者の働きがいを深めていく討論を進めることができた。



【チャレンジド・プロ清掃研修②の様子】

取組の成果と課題

(1) 成果

- ・ コロナ禍をプラスに捉え、研修会をオンライン開催に変更することで、全国から参加者が集まり、普段参加できない方々と意見交換することができた。
- ・ 障がい者が生き活きと活躍する姿を実際に見学することができた。
- ・ プロ清掃について参加者みんなで考えることで、障がい者の社会進出（共生社会）のきっかけをつくることができた。

(2) 課題

- ・ プロ清掃の働く場づくりの拡大には、まだまだ地域社会への理解促進が必要である。
- ・ 行政担当者の理解と支援について温度差があることが課題であり、引き続き理解促進が必要である。
- ・ 福祉事業所の支援員の人員確保やスキルアップ等、人材教育に関する課題が見えてきた。

今後に向けて

(1) 障がい者の社会進出（共生社会）の実現について

- ・ 民間企業、福祉事業所、行政との連携強化を図り、障がい者の仕事づくりを促進させたい。
- ・ 障がい者が地域の中で働くことへの理解促進に向けた周知活動を発展させたい。
- ・ 民間企業へ障がい者雇用の必要性と可能性を周知する機会をつくりたい。

(2) 「障がい者の働きがいを考える」について

- ・ 障がい者が地域社会の中で働くこと（社会の一員となる）が重要であるため、様々な関係機関と連携していける仕組みづくりを考えていきたい。
- ・ 「生きるために働くのではなく、働き（生き）がいのために働く」場づくり提供を行いたい。
- ・ 毎日、「ありがとう」を言ってもらえる職場環境づくりを整えることが大切である。

株式会社 グローバル・クリーン

<http://globalclean.co.jp/>



障がいのある人とその家族と共に楽しみ、学び合う野外活動を求めて

実践研究 6

霧島おむすび自然学校

〈小林市〉

取組の目的

- ・ 障がい者とその家族、ボランティアが互いにコミュニケーションを深め、互いのニーズや願い（思い）を共有する。
- ・ 野外活動のボランティアの体験を通して、障がい者との関わり方や支援について学びながら、活動自体楽しむ。
- ・ 協働事業による体験活動を行うことで、障がい者の野外活動における経験を広げ、学びを深める。

取組の経緯

障がい者とその家族がもつニーズや願いを事業に反映させるため、事業毎の振り返りなど情報交換の場を大事にすると同時に、支援者であるボランティアの確保と育成にも力を入れることにした。また、私たちと同じ障がい者の学びを支える人たちとの協働事業で、障がい者やその家族の新たな経験や学びを期待して、取り組むことにした。

取組内容

I 障がい者と家族と共に楽しむための野外活動の実践

今年度、悪天候やコロナ感染の影響で断念した事業がある中、以下の枠に示す8事業を行うことができた。知的障がい者や発達障がい者120名（家族を含めた延べ人数）の参加があり、年齢は5歳～48歳だった。ボランティアとして、高校生、大学生、社会人（高校・支援学校教諭、福祉事業所職員、会社員等）の62名（延べ人数）が参加協力した。

【実施事業】

- 9月：須木すき！フットパス～秋のあじわいウォーキング&栗拾い（2回実施）
- 10月：おむすび田んぼのがっこう（第2弾）～稲刈りとかけ干しに挑戦！
 - ：エコパーク綾で秋さがしウォーク&ピザ作りに挑戦
 - ：小原梨園で秋の自然あそびと“なし狩り”を楽しむ
- 11月：霧島“おむすび山（高千穂峰）”チャレンジ登山
- 12月：えびの高原のんびりハイク～白鳥山の山歩きと二湖展望を楽しむ！
ボランティア研修会（料理研究と情報交換会）
- 1月：西都原で新春ウォーキング～古墳めぐりと神社参り～



【10月:なし狩りと自然遊び】



【9月:フットパス】



【10月:稲刈り・かけ干し】



【11月:おむすび山(高千穂峰)登山】

2 障がい者の野外活動を通じた経験を広げ、学びを深めるための実践

民間団体のポン太クラブ（都城市）と行政の立場で生涯学習に携わる社会教育課（小林市）との協働事業に取り組んだ。

（1）ポン太クラブとの協働事業

ポン太クラブは、障がい児（者）や家族（兄弟・姉妹に保護者）、ボランティアが集まり、学習会や交流会などさまざまな活動を行っている団体である。

この団体と以下に示す内容で1泊2日の防災キャンプを協働で行った。参加は24名であった。幼児～中学生9名、大人10名、ほかボランティア5名。

ポン太の防災プチキャンプ～わくわくテントと自然あそび！～

期日) 令和3年11月27日～28日(日)

時間) [1日目] 13:50～ [2日目] ～12:00

場所) 都城きりしま支援学校体育館・運動場と周辺

関之尾滝、関之尾甌穴群とその周辺

内容) <1日目> テント設営(泊) 食事作り&会食

ネイチャーゲーム 歌声ひろば スターウォッチング

<2日目> 甌穴群・滝巡りほか自然散策



【調理活動】



【テントと夕食:支援学校体育館にて】



【関之尾滝（都城市：日本の滝百選）】

（2）小林市社会教育課との協働事業

小林市社会教育課との協働では、生涯学習講座に位置づける形で、以下に示す内容で事業を行った。16名が事業に参加。内訳は、就労支援事業所利用の障がい者5名と同事業所職員2名、事務局1名、民生委員4名、県・市職員4名であった。

須木を歩こう！“フットパス”を楽しもう！

期日) 令和3年12月21日(火)

時間) 12:50～15:00

場所) 須木下田・中原区内（須木庁舎 発着）

内容) 須木下田・中原区（3.6km）内ウォーキング

※ 自然や風景をあいながら、町並みや風景、住民の方々とのふれあいを楽しむ



【須木の紹介を熱心に聞く二人】



【須木小学校の児童の通学路に行く】



【利用者さんと会話を交わす】

取組の成果と課題

(1) 成果

<障がい者と家族が共に楽しむための野外活動の実践について>

ア コロナ禍で高まった体験活動の必要性

事業ごとに参加の様子や体験内容について振り返りを行った。感想を聞く中で一番印象に残ったのは、コロナ禍にあって体験を楽しめた喜びを口にするご家族が多かったことである。障がい者の中にはずっと外出できずにストレスをためてしまったり、自粛生活が長引いたことで事業所に通えなくなったりして、精神面に影響を受けた人たちがいた。こうした中、今年初めて当団体の事業に参加したという小学生は、両親の誘いもあって別の体験に引き続き参加し、親も感心するほどの作業ぶりだった。また数年ぶりに体験に参加した20代男性と母親との再会を喜んだだけでなく、本人が笑顔で参加する姿にふれ、次回参加への期待もふくらんだ。未体験の事業に積極的な活動ぶりを見せた他の20代男性からは、「次の(未体験の)事業も楽しみたい。また参加します。」との感想を聞くことができた。

こうしたうれしい出来事に出会えたのも、体験を続けていたからこそである。コロナ禍という困難な状況の中、でき得る限りの対策を家族と協力して行うことで体験の可能性が広がることを実感できた。

イ ボランティアの育成

事業を可能にするための対策以外に、ボランティアの協力も大きかった。今年度の事業では毎回3~5名(登山時は20名)のボランティアの方が協力してくれた。コロナ禍という特殊な状況下のため、普段とは違った気持ちでボランティアへの参加確認と情報交換を行った。今回は、安全安心の体験を行う上で、ボランティアの数や経験の度合いから、不安を覚えることなく活動に集中できたことはよかった。

ボランティア育成に関しては、今回の事業とは別に2回のカヤック指導研修を行った。研修に参加者からは、「声かけが難しく、不安な気持ちで説明をすることが多い。どのタイミングで支援したらよいか迷うことがある。」等の悩みを聞くことができた。このことを受け、ボランティアをお願いする際、役割や仕事内容について理解できているか、不安はないか等を確認した上で、具体的な支援の仕方についてアドバイスや助言をするという対応が必要なのことがわかった。12月のボランティア研修会の折には、このことについて他のボランティアとも共有した。こうした対応以外にも、障がいのことや個別の対応など質問や疑問が飛び交い、有意義な情報交換ができた。

<障がい者の野外活動を通じた経験を広げ、学びを深めるための実践について>

ア ポン太クラブとの協働事業(振り返り)

- ・ 今回のキャンプは概ね満足したことが分かる感想が多かった。
- ・ 防災の意識を持たせるねらいについての振り返りが不十分であったが、寒さや不便さの中、テント泊や防災食を体験できたことはよかった。
- ・ 支援者という立場でポン太クラブの皆さんと交流できてよかった。個人としても団体としてもつながりを深めるよい機会となった。

イ 小林市社会教育課との協働事業

(ア) 活動の様子について

- ・ 歩いたコースと距離(約3.6km)は、参加者の様子や感想等からも無理のないものだった。
- ・ 補装具を付けて歩かれる方や運動不足から歩きがおぼつかない方がおられ、坂道や後半の歩きを心配したが、無事に歩き通すことができた。
- ・ フットパス(人と自然と暮らしにふれるウォーキング)体験は、就労支援事業所の障がい者の方や職員から「楽しかった」との感想が聞かれ、よい感触が得られた。

(イ) 生涯学習講座における協働事業の可能性について

- ・ 生涯学習講座の中でも参加が多いウォーキングは、条件さえ整えば障がい者も健常者の人たちと一緒に楽しめる内容である。運動不足が特に心配される障がい者にとっては、楽しむことと同時に健康や体力維持が目的にもなる。

(ウ) 民間団体や関係機関等との連携のあり方について

- ・ 事業の実施に向け、当団体を含め小林市の社会教育課、福祉課、社会福祉協議会と情報交換する場を設けたことは、今後連携につながる大きな一歩になった。



4者会議:社会福祉協議会, 小林市社会教育課, 小林市福祉課, 霧島おむすび自然学校(民間)

(エ) 社会福祉協議会、福祉課、霧島おむすび自然学校との連携により得られた変化

- ・ 障がい者対応に関する知識や経験不足を補うことができた。
- ・ 障がい者も参加しやすい講座（生涯学習講座）となるよう、チラシに障がいのことや支援内容等の説明文を掲載することを、具体的に見直すことにした。

(2) 課題

- ・ ボランティアを要請する際に学生への広報が不十分だった。複数のアクセス方法を考え、対象者にしっかり届けられるようにしたり、学生が所属する教育機関の教官に理解と協力が得られるよう働きかけたりする必要がある。
- ・ 天候やフィールド状態の変化に対応できる幅広いプログラムの開発を行うことで、体験に広がりをもてるようにする必要がある。
- ・ 社会教育課との協働事業は、モニター的要素が大きく調査とその評価が重要だったが、事業運営の主体となるとところが不明確で連絡・調整や進捗状況の確認など、必要な動きが円滑でなかった。事業運営における役割分担の見直し・確認が必要である。
- ・ 協働事業を模索していく上では、実践を行う立場の民間団体をはじめ、行政や関係機関等がそれぞれもつ情報や専門的知識、業務上のノウハウ等をどのように有効活用できるのか、確認しておく必要がある。

今後に向けて

(1) 野外活動におけるボランティア育成を積極的にすすめる

- ・ 大学や専門学校等との信頼関係に基づいたボランティアの要請を行うとともに、適切な体験内容と役割分担等を行う。
- ・ ボランティア同士の学び合いを通じて、障がい者への関わり方や個々に応じた支援の仕方などを具体的に学べるようにする。

(2) 障がい者とその家族、ボランティアとの交流を深め、支え合い、学び合いの関係を育む

- ・ 障がい者本人や家族のニーズや要望、願い（思い）を共有する。
- ・ 体験活動を共につくるための意見交換をしたり、事業の成果を分かち合ったりするなど、障がい者とその家族、ボランティアとの結びつきを深め、事業推進に役立てる。

(3) 協働事業を通して得た情報や運営の仕方等を団体間で共有し、新たな事業に活かす

- ・ 事業運営の主体を明確にして連絡・確認を細やかに行う。

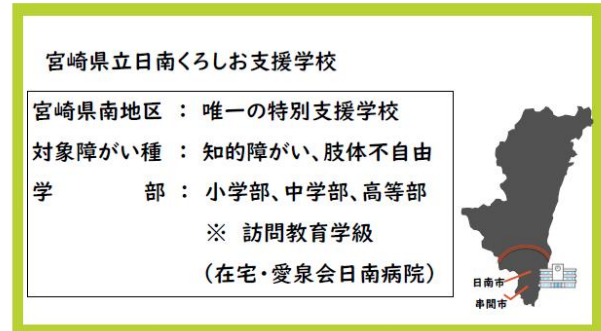


○ 取組推進校

1 宮崎県立日南くろしお支援学校



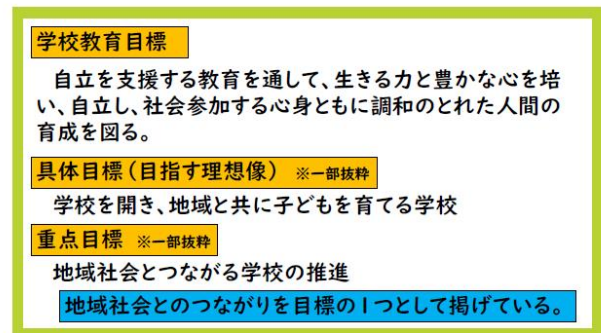
1



2



3



4



5



6

地域活動につなげる これまでの成果と課題

成果

- 生徒たちが活動に対し主体的に取り組めるようになった。
 - ・ アイデアを出し合う(話し合い活動)
- これまでの先輩をみてきて、活動に対するあこがれや意欲が高まり主体的に取り組むことができるようになった。
 - ・ 学習などに取り組む姿勢
 - ・ 地域の方とのやりとり(コミュニケーション)

7

地域活動につなげる これまでの成果と課題

課題

- 生涯学習という観点から考えると、高等部での取組が卒業後の地域活動へつながりにくい。
 - しかし、卒業後も神楽に参加したり、福祉施設での販売活動など行ったりしている生徒もいる。
- ここ数年は新型コロナの影響もあり、卒業生同士の交流の機会も減ってきている。

8

地域活動において 生徒への調査(高等部2・3年生)

1. 現場実習の休みの日は何をしていますか。
2. 学校を卒業した後にやってみたい学習がありますか。
3. 具体的にあればかいてください。

9

地域活動において 生徒への調査(高等部2・3年生)

1. 現場実習の休みの日は何をしていますか。

- | | |
|-----------------|------------|
| ○ ゲームをする | ○ 音楽をきく |
| ○ SNSで友だちと連絡をする | ○ 動画を見る |
| ○ 映画をみる | ○ 絵をかく |
| ○ 現場実習の準備をする | ○ 筋トレをする |
| ○ 家の手伝いをする | ○ 家でゴロゴロする |
| ○ テレビをみる | ○ パズルをする |

10

地域活動において 生徒への調査(高等部2・3年生)

2. 学校を卒業した後にやってみたい学習がありますか。



宮崎県障がいのある人の生涯学習の推進を参考に生徒へアンケートを実施

11

地域活動において 生徒への調査(高等部2・3年生)

2. 学校を卒業した後にやってみたい学習がありますか。

- | | |
|----------------------------------|------|
| ① 学校で学んだ内容の維持・再学習 | ・・・2 |
| ② 余暇・レクリエーション活動 | ・・・5 |
| ③ 文化芸術活動 | ・・・3 |
| ④ 健康の維持増進・スポーツ活動 | ・・・6 |
| ⑤ 個人の生活に必要な知識・スキル | ・・・5 |
| ⑥ 社会生活に必要な知識・スキル | ・・・5 |
| ⑦ 仕事のスキルアップや資格・免許取得など、職業生活に関わる学習 | ・・・3 |
| ⑧ 仲間づくり、人間関係等に関する学習 | ・・・1 |

12

地域活動における 生徒への調査 (高等部2・3年生)

3. 具体的にあれば教えてください。

- 編み物教室
- 地元の伝統的な祭り
- 旅行
- 音楽を習ってみたい
- ダンスを習いたい
- 社会で必要な知識を知っておきたい
- 人との関わり方について学習したい

現在の生活では休みの日に1人で過ごすことが多い生徒たちも、学校を卒業してやってみたい学習や活動は多い。

13

地域活動につながる取組

今回の授業実践の目的

生涯学習へのイメージづくり

知る

体験する

生涯学習の意欲向上

14

地域活動における
卒業生を中心とした かがやきエイサー



15

地域活動における
卒業生を中心とした かがやきエイサー



16

地域活動につながる取組

生涯学習へのイメージづくり **知る**



17

地域活動につながる取組

生涯学習へのイメージづくり **知る**



18

地域活動につなげる取組

生涯学習へのイメージづくり

体験する



19

地域活動につなげる 授業後の感想(回答数40名)

- かがやきエイサーのみんなとの学習は楽しかったですか

はい 40名 いいえ 0名

- 卒業したら 自分も何か活動をしてみたいと思いましたが

はい 34名 いいえ 6名

20

地域活動につなげる 授業後の感想

生涯学習へのイメージづくり

知る

エイサーはテレビで見たことはあったけど、近くで見ると迫力がすごくて楽しかったです。

生涯学習へのイメージづくり

体験する

本物の道具を使わせてもらってうれしかったです。

生涯学習の意欲向上

卒業したら自分も好きなことを探して仕事と両立できるようにがんばりたいです。

21

地域活動につなげる取組

成果

- 本校を卒業した先輩との活動を通して、卒業後の余暇活動や社会参加、職業生活を身近に感じ、知ることができた。
- エイサーの鑑賞では、衣装のかっこよさや音の大きさなど体験することができ、生徒からも「かっこよかった」「やってみたい」という感想を聞くことができた。
- 卒業後にも様々な活動があることを生徒だけでなく、本校職員にも周知することができた。

22

地域活動につなげる取組

課題

- 日南市育成会の活動にはボウリングや募金活動などもあり、今回の授業の中で紹介したが、活動の魅力などについて伝えることができずに、生徒からの感想でも触れられていなかった。
- 保護者に対して、生涯学習について啓発していく必要がある。今回の活動だけでなく、串間市や他団体、講座等についての案内や紹介を行っていく。
- 地域での活動については勤務時間外や休日に実施していることが多く、今後、継続して取り組むことの有効性は感じるが、学校と地域がどのように分担して関われるのか課題である。

23

地域活動につなげる取組

今後の取組

- かがやきエイサーの先輩との活動を今後も継続して取り組み、生涯学習への意欲を高める。新型コロナウイルスの感染状況次第によるが保護者への案内を随時行っていく。
- 今回紹介できなかった地域の様々な活動などについて、進路便りなどで啓発活動を行っていく。

24

2 宮崎県立都城きりしま支援学校



1



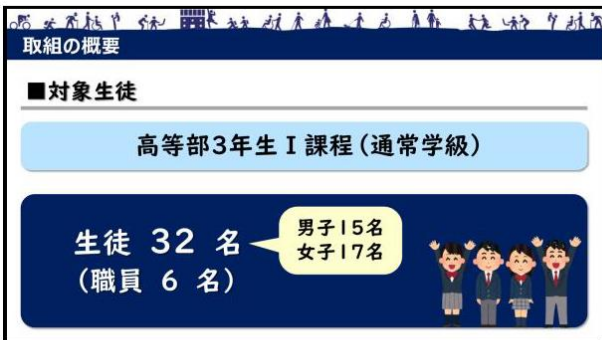
2



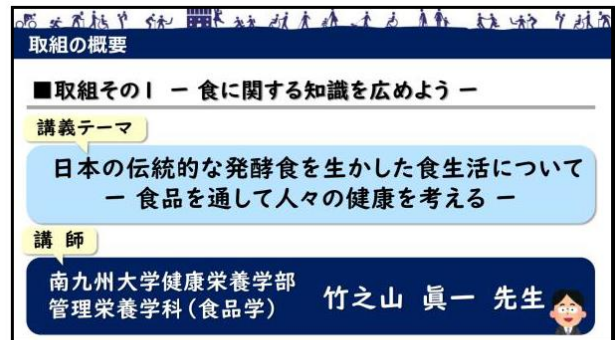
3



4



5



6

取組の概要

■取組その1 - 食に関する知識を広めよう -

取組の実際

【講義内容】「日本の伝統的な発酵食を生かした食生活について」
- 食品を通して人々の健康を考える -

| | |
|---------------------|-------------|
| 1 食品の役割 | 5 たんぱく質の役割 |
| 2 炭水化物(パン、ご飯、麺類)の役割 | 6 植物性食品 |
| 3 食物繊維の役割 | 7 味噌の加工について |
| 4 脂質の役割 | 8 香辛料について |

7

取組の概要

■取組その1 - 食に関する知識を広めよう -

取組の実際



8

取組の概要

■取組その1 - 食に関する知識を広めよう -

取組の実際



専門的な内容を
分かりやすく説明

9

取組の概要

■取組その1 - 食に関する知識を広めよう -

取組の実際



いろいろな質問を
する生徒たち

10

取組の概要

■取組その1 - 食に関する知識を広めよう -

取組の成果

- 授業では聞くことのできない「食」に関する専門的な内容を、分かりやすく教えていただき、「食」に対する興味・関心が高まった。
- 講義終了後、普段は消極的な生徒たちが、講師のところへ行き質問をする様子が見られた。

11

取組の概要

■取組その1 - 食に関する知識を広めよう -

取組の成果

- 講義後のアンケートで、「和食のイメージが更によくなった」、「食べ物を大事にすることは、自分の体を大事にするということが分かった」という回答が見られた。生徒たちは、「食べることは自分をいたわり、心と体を健やかにすることだということに気付くことができた。

12

取組の概要

■取組その2 - 食に関する体験をしよう -

体験テーマ

味噌づくりをしよう

講師

管理栄養士、栄養教諭
「つながる味噌づくり」主宰 **花房 範子 先生**

13

取組の概要

■取組その2 - 食に関する体験をしよう -

取組の実際

熱心に味噌づくりに
取り組む生徒たち



14

取組の概要

■取組その2 - 食に関する体験をしよう -

取組の実際



15

取組の概要

■取組その2 - 食に関する体験をしよう -

取組の成果

○ 生徒たちは、味噌汁や味噌ラーメンの材料である「味噌」の存在に興味・関心を示し、自分たちで作ることのできる調味料であることを知ることができた。

16

取組の概要

■取組その2 - 食に関する体験をしよう -

取組の成果

○ 味噌づくりが生徒の家庭でも話題に上がり、講師の先生からいただいた味噌づくりのレシピを用いて、家庭でも味噌づくりにチャレンジする生徒が見られた。

17

取組の概要

■これからの取組について

○ 南九州大学宮崎キャンパスで行われている「食を通したこどもと大人の交流会」を都城キャンパスでも計画していただくよう打診している。
本校生徒や卒業生に参加を勧め、生涯学習の場としての活用を進めていきたい。

18

取組の概要

■これからの取組について

○ 講師の花房範子氏が支援活動をしている都城・北諸県圏域の「こども食堂」及び生活困窮者世帯への食材提供の支援を行う「みまたん宅食どうぞ便」でのボランティア活動への参加や「つ・な・がる味噌づくり」活動への参加など、学校卒業後の生涯学習としての取組の場を提供していきたい。

